



みんなで上げよう
フェニックス!

みんなで上げよう フェニックス!



文：小方恵子
絵：大塚 朗



文：小方恵子
絵：大塚 朗

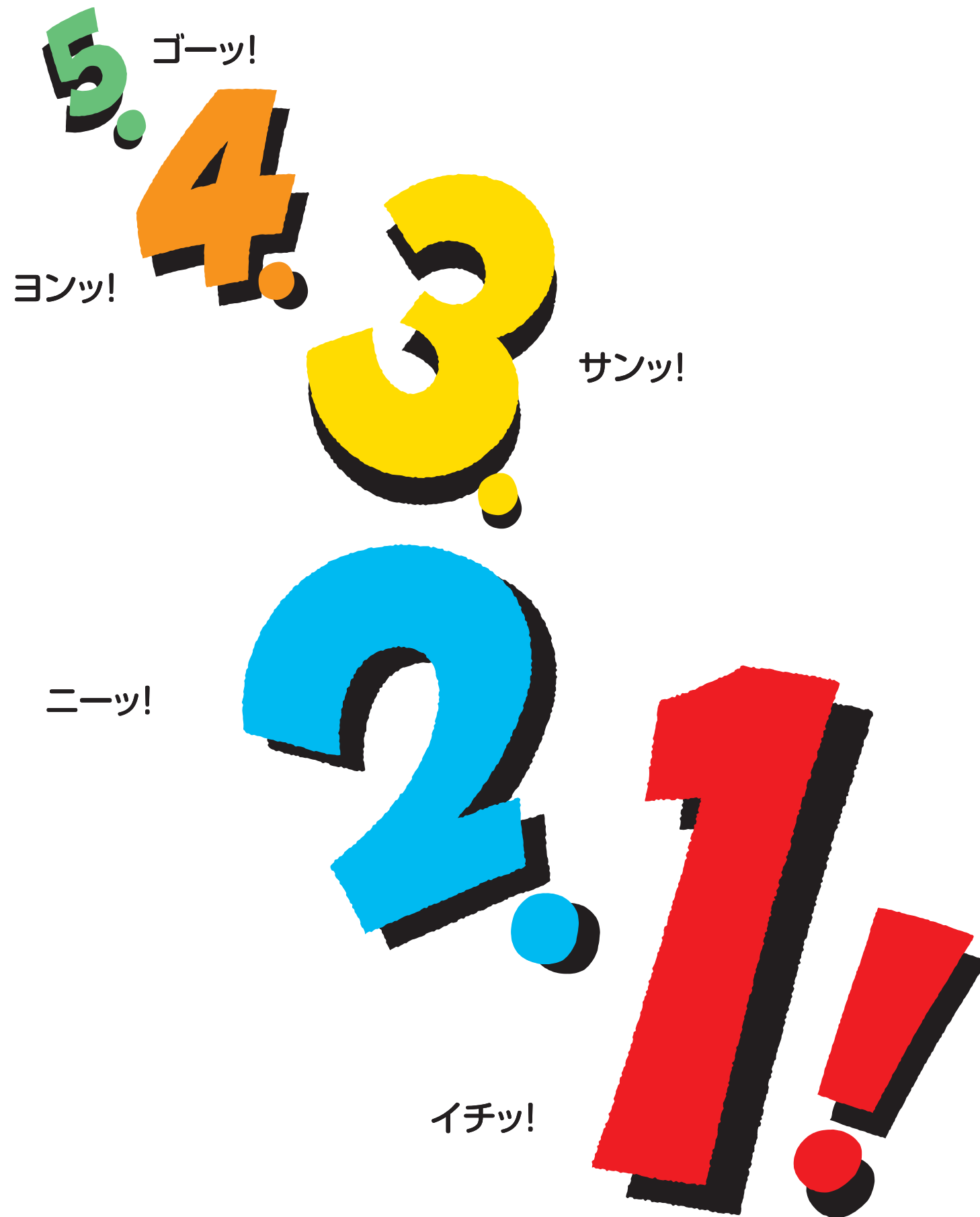
ともだち しょうかい
わたしの友達を紹介します。

なまえ
名前はフェニィ。

ながおか う はな び ようせい
長岡生まれの花火の妖精。

たんじょう
フェニィはこうして誕生しました。

それでは、みんないっしょに！
フェニックス花火の打ち上げの
カウントダウンをしよう！





ドドン

バボン

ピュ〜ッ

ピュ〜ッ

おは〜!

わ〜!

みんな大好きな長岡花火のフェニックス。
たくさんの人たちが信濃川沿いに集まって、
いろんな思いで花火を見上げています。



わたしたち家族も楽しみにしています。



お父さんが言いました。
このフェニックス花火は
みんなの力で打ち上げられているんだよ。

そうです。
この花火には特別な思いがこめられているのです…

あれは…

^{へいせい}平成^{ねん}16年^{がつ}10月^{にち}23日^ご午後5時^じ56分^{ぶん}。

^{わたし}私たちの^す住む^{ちゅうえつ}中越地方^ちを^{ほう}大きな^{おお}地震^じが^{しん}おそいました。

^き聞いた^じことのないような地ひびき…

^{いえ}家は^いプリンのようにゆれて…

^か家具^ぐがたおれたり、^{まど}窓ガラスがわれたり…

^{ちい}まだ小さかったわたしは… こわくて…

こわくて…

^{おお}大きな^{かいじゅう}怪獣^{まち}が街ごとひっくり返そうとしているのか!?

^{おも}と、思いました。



「こわいよー!」



いま ^な泣きそうになると、
いっしょに遊んでいたお兄ちゃん(にい)が、
わたしを抱きしめて、
かばってくれていることに気づきました。

とう お父さんもお母さん(かあ)も
まだ、仕事(しごと)から帰(かえ)ってきていません。



ああ… お兄ちゃん(にい)、ありがとう。
わたし、がまんして泣(な)かないよ!

そして、ようやく帰(かえ)ってきた
お母さん(かあ)の顔(かお)が見えた瞬間(み しゅんかん)…



「わーん!」

どんなにこわかったか…

ほっとして、

こらえていた^{なみだ}涙があふれてきました。



まちじゅう でん き き ま くら なか
街中の電気が消えて、真っ暗の中、

やっとの^{おも}思いで避難所^{ひ なん じょ}に行くと

たくさんの^{ひと}人たちが、^{あつ}集まってきていました。

わたしよりも^{ちい}小さな^{あか}赤ちゃんや、

^{とし よ}お年寄りも…

みんなおなかが

すいているようです。



^{だいじょうぶ}
「大丈夫だからね。がんばろうね。」

^{すこ}少しからだがふるえているわたしを見て、
^{きんじょ}近所のおばあちゃんが
おせんべいをわたしてくれました。

みんながおなかぺこぺこで、^{たいへん}大変なときに
^{たいせつ}大切な^た食べ物^{もの}を、わたしにくれるなんて…



うれしくて うれしくて、おいしくて おいしくて…
なんだかとても^{しあわ}幸せな^{あじ}味がして
^{むね}胸がいっぱいになりました。



そしてわたしは、
こうしてみんなが^{はげ}励ましあったり
^{たす}助けあったりすることの^{たいせつ}大切さを、
^{わす}忘れないようにしようと思いました。

わたしたちの生活がすこしずつ^{せいかつ}元^{もと}どおりに
^{ちか}近づいてきたころ…



^{ながおか}“長岡のみんなが、心^{こころ}の底^{そこ}から
^え笑顔^がと元^{げん}気をとりもどすには
どうしたらいいだろうか?”

^{じ しん}“地震^{おうえん}のときに応援^{おうえん}してくれた
^せ世界中^{かいじゅう}の人^{ひと}たちに
^{かんしゃ}感謝^きの気持ち^もをあらわすには
どうしたらいいだろうか?”



^{おとな}大人^{あつ}たちが集^あまって、
みんな^ちで知^え恵^だを出^あし合^あい
はじめました。

そして…



ながおか ほこ
長岡の誇り！ みんなが大好きな長岡花火で、
おも う あ ひょうげん
この思いを打ち上げて表現しよう！

そうすればきっとみんなも
げん き
元気をとりもどせるはず！

よお～し！
ながおか げん き
長岡は元気にがんばっているんだということを
せ かいじゅう
世界中にアピールするぞ！

ちから ちい
ひとりの力は小さくても、
ちから あつ
みんなの力が集まれば、
おお ちから
大きな力になることを
じ しん
つらかったあの地震が
おし
教えてくれたんだ。

こんなん ま ながおか ひと
どんな困難にも負けない長岡の人たちを
ふ じ み とり ひょうげん し
不死身の鳥と表現して市のマークにもなっている。

よし！ ふ し ちょう
不死鳥＝フェニックスとして
なつ よ そら
夏の夜空にはばたかせよう！

たのもし^{おとな}い大人たちは
すぐ^{こうどう}に行動をはじめました。



なかなか^{りかい}理解して
もらえないことも…



あちこち^{かいしゃ}の会社に
お願い^{ねがい}に行^いったり…



いろん^{ほ きん かつどう}なところで募金活動^{ほきんかつどう}をしたり…

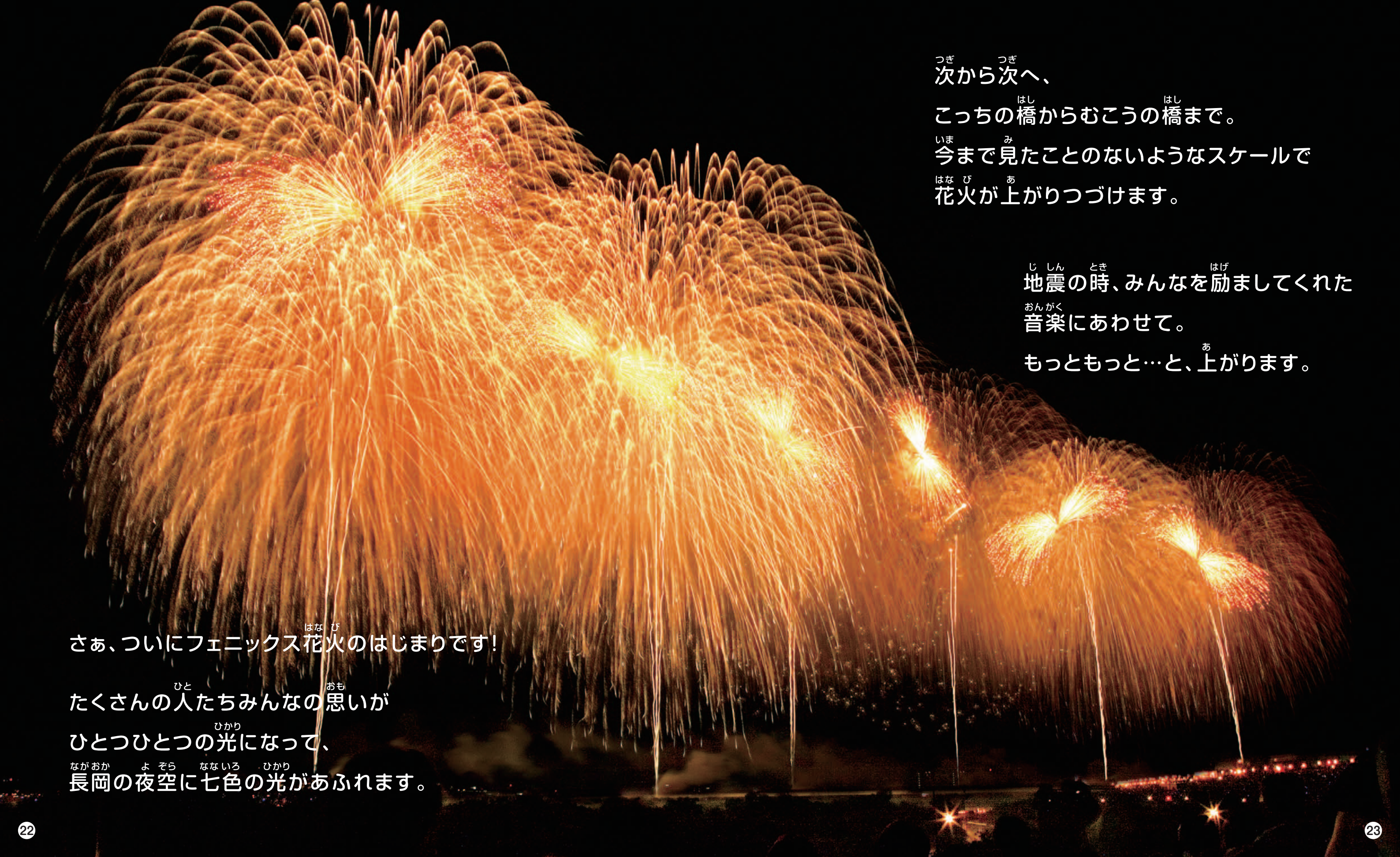


わたしも、おこづかい^{なか}の中から
ちょっぴり^{ほ きん}だけ募金^{ほきん}をしました。

そして…

ま
待ち^まに待^まった
はな^{はな}び^び
花火^{はなび}の日^ひがや^ひって^ひきた^ひのです…





つぎ つぎ
次から次へ、

こっちの橋^{はし}からむこうの橋^{はし}まで。

いま み
今まで見たことのないようなスケールで

はな び あ
花火が上がりつづけます。

じ しん と き はげ
地震の時、みんなを励ましてくれた

おん が く
音楽にあわせて。

あ
もっともっと…と、上がります。

さあ、ついにフェニックス花火^{はな び}のはじまりです！

たくさん^{ひと}の人たちみんなの^{おも}思いが

ひとつひとつの^{ひかり}光になって、

ながおか よ そら なないろ ひかり
長岡の夜空に七色の光があふれます。

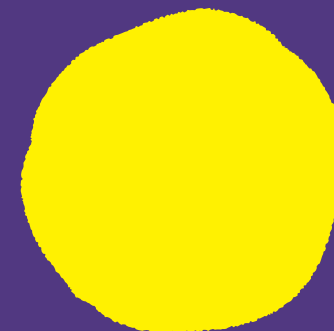
「わあ〜」

わたしはポカーンと口をあげたままに。
あまりの迫力に圧倒されてしまいました。

そして思いました。



こま 困ったときに助けてくれた人、
はげ 励ましてくれた人、




やさしいお兄ちゃんや、
大好きな家族、
大切な人、

みんなに見てほしいと。

フェニックスを見上げながら、
あの、おせんべいをもらった時のように
あったかい気持ちになって、
笑いながら、
涙があふれてきました。





はじ
初めてのフェニックスが無事大河に舞い上がり、
さいご
最後の花火が消えたところ…

しなのがわ か せんしき かんどう かんしゃ はくしゅ かんせい
信濃川の河川敷は“感動と感謝”の“拍手と歓声”で
いっぱいになりました。

う あ けいかく
打ち上げを計画して

おとな め
ずっとがんばってきた大人たちの目には
おおつぶ なみだ
大粒の涙がこぼれたのです。

そして、はじめて、心の底から笑いあいました。

それからまいとし ねんねん おお
毎年、年々スケールも大きくなり、
かくち
各地でフェニックスが打ち上げられるよう
になりました。



5.

ゴーッ!

4.

ヨンッ!

3.

サンッ!

2.

ニーッ!



1.

イチッ!

家族の絆

平成十六年十月二十三日、ぼくたちの長岡市を中越地震が襲った。その時、ぼくは保育園の年長組で、兄とベッドの上でゲームをしていた。そして、突然大きな揺れを感じた。その時、兄がぼくの事をだきしめ、かばってくれていた。そのおかげでぼくは恐怖に耐える事が出来た。そして大きな揺れがおさまって、祖父たちが共稼ぎの両親に替わって救出に駆けつけてくれた。ぼくたちの部屋の外は、家具が倒れ、ガラスが割れ、電気が消えていた中を祖父は、ぼくたちがはくスリッパを持ち、家具をはらいのけながらぼくたちを助けに来てくれた。そのおかげでぼくたちは、家の外に無事避難する事が出来た。その頃、仕事から帰って来た母を見た時、ぼくはそれまでこらえていた気持ちを泣きながら母に伝えた。その日の夜から車の中で寝る生活が始まった。

少し気持ちが落ち着くと、何も食べていない事に気が付いた。その時、母のかばんの中から、一つのパンが見つかった。母はそのパンをぼくたちに

「食べなさい。」

と言ったけれども、ぼくも兄も母が何も食べていない事に気が付き、そのたった一つのパンを食べる事が出来なかった。ぼくはこの時初めてこのような気持ちになった。いつもなら平気で食べていた物が、その時だけはとても大事に思えた。

この時、大切な物はなんだったのか分かったような気がする。それは、ぼくの家族が食事をする時、台所に集まって食事の間中、いつもみんなで話をしたり食べ物を分け合ったりしながら過ごす毎日がとても幸せな事だと分かった。

復興を願って打ち上げられるフェニックス花火を見る時、ぼくたちはこの地震を乗り越えられた喜びを感じる。

十月二十三日。私はこの日の事を忘れない。

秋の夕暮れ、午後五時五十六分。異様な地響きと共に奇妙な揺れが新潟県を襲った。車に乗っていた私と家族は、幼稚園に通っていた弟のいたずらかと、初めは思っていた。街の明かりが取り始める。この異常には、鈍感な私も流石に気づいた。

家に帰ると、近所の人達が集まっていた。まず始めにした事は、お風呂場にいる祖父を救出することだった。父が作業をしている間、私は何をしてたか覚えていない。覚えてるのは、温かく小さい、弟の手の感触だけだ。隣の家のお姉さんが何度も「大丈夫だからね。」と声をかけてくれた。

避難所に向って歩いた道は、いつもと違っていた。墓地の墓は崩れ、道路は割れていた。長く感じた。祖母は「ナマンドブ。」と念仏を唱えていた。色々な人が「がんばれ。」と言っていた。怖いのか、声援がうれしいのか、私は小さな小さな涙を流していた。

避難所の上をヘリコプターが飛んでいた。地域の消防団が避難を呼びかけていた。人々は皆、家族や近くにいる人を支えていた。人間の本当の強さが見えたような気がした。避難所では近所の人がおせんべいをくれた。ただでさえ、食べ物をもたらえるか、もらえないかの状態なのに、私に醤油のおせんべいをくれた。それのおせんべいはどんなおせんべいよりも、おいしく感じた。

それから一年たった、二〇〇五年。八月の夜空に不死鳥が舞った。BGMを聞くと、五年過ぎた今でもあの時の悲劇を思い出す。リアルすぎる現実が脳裏をよぎる。でも、それと同時に人々の助け合った姿や家族、近所の人達の素敵な姿がよみがえる。

十月二十三日。私はこの日の事を忘れない。怖かったし、大変だったけど、自分の街の団結力が深まったと思えて、何より、感謝することが山ほどあるからだ。きっとこれからも忘れないだろう。

写真で振り返る“フェニックス花火”

2005



震災復興祈願花火フェニックス

震災の翌年、平成 17 年 8 月 2 日打上。
6 ヶ所打上、打上幅最大約 1.6km。
名曲『ジュピター』にのせての打上。

Photo : Hirotomo Inoue

2006



復興祈願花火フェニックス

この年、10 市町村合併記念も重なり 10 ヶ所打上に挑戦。打上幅最大約 1.7km。
今でも「この年のフェニックスは凄かった」の声を聞く。

Photo : Hirotomo Inoue

2007



復興祈願花火フェニックス

演出・構成も格段に UP。「長岡大花火大会になくてはならないもの」との声も。

Photo : Yoshinori Tsuchida

2008



復興祈願花火フェニックス

ますます、彩り鮮やかになる「フェニックス花火」。

Photo : Akio Hashizume

2009



スーパーフェニックス

震災復興 5 周年を記念し、2 尺玉 3 発を加え長生橋上流まで広がった「スーパーフェニックス」は、圧巻。打上の最大幅は、2.6km まで達した。

Photo : Hirotomo Inoue

2010



ニューフェニックス

6 回目を迎えるこの年は、復興 10 年を目指し新たなスタートの年と捉え、「ニューフェニックス」と銘打って、2 尺玉 6 発同時打上に挑戦。打上最大幅は前年を超える 2.7km。8 月 3 日は、銀色のフェニックスが舞った。

Photo : Hirotomo Inoue

「伝え、語り継いで行く」 感謝の気持ちを忘れない

2004 年 10 月 23 日。未曾有の災害中越地震… 当時のことを思い出したくもない出来事と封印してしまいたい方もたくさんいらっしゃると思います。しかし、二度の戦禍から立ち上がった歴史をもつ私たちの故郷長岡。私たちの身体には不屈の長岡魂が脈々と受け継がれています。その不屈の精神で震災から立ち上がり今日を迎えているのです。その道のりにおいて、全国、全世界から沢山のご支援、沢山のお見舞いや激励を戴きました。その多くの方々への感謝の気持ちを決して忘れてはいけません。同時に、不屈の長岡魂を私たちの世代まで伝え残してくれた先人への感謝の気持ち、共に力を合わせて頑張っている仲間への感謝の気持ちも失くしてはいけません。今を生きる私たちにはこの思いを後世に伝えてゆく責任があるのです。その私たちの誓いの花火、感謝の花火が復興祈願花火フェニックスです。伝え、そして語り継いでゆくために、震災当時の記憶を市内の小中学生に作文に著してもらい、その作文をもとにこの絵本を製作いたしました。

NPO 法人 復興支援ネットワーク・フェニックス

代表理事 樋口 勝博

今回の作文募集において大変多くの応募をいただきました。
 ご応募いただいた皆様、並びに関係各位に厚く感謝を申し上げます。

応募総数	小学生 145 作品／中学生 703 作品			合計 848 作品
最優秀賞	大島小学校 5 年	井開 慎太郎	岡南中学校 1 年	山下 実来
優 秀 賞	柿小学校 4 年	西澤 陽奈子	東北中学校 2 年	川上 あずみ
	山古志中学校 3 年	齋藤 健輔		
優 良 賞	上記以外の 34 作品			

※学校名学年は応募当時（平成 21 年 9 月時点）のものです。

中越大震災は、山を崩し、道を断ち切り、家を壊し、人の命まで奪う大災害でした。人々を不安に陥れ、家庭の語らいはふつつりと途絶えました。子どもたちの作文には、それまでに経験したことのなかった恐怖や心の痛みが綴られていました。

けれども、あの厳しい揺れは、人々の中で半ば眠っていた心も揺らしたようです。助け合い、思いやり、やさしさ、自分のことを忘れ人を気遣うという、かつて日本人が、そしてとりわけ長岡の人が誇りにしていた心もちが目を覚ましたのです。子どもたちはみなそのことに気付いています。見ず知らずの人に食べ物を差し出す人の姿、その心を子どもたちは瞬時に焼き付けました。厳しい災害にもかかわらず、苦労話やうらみだけで終わらなかったことをせめてもの、そして大きな幸いとしてとらえてよいのではないのでしょうか。

夏のフェニックスを見上げる人々は、困難に立ち向かい、力を合わせて乗り越えた思いと、復興に携わった人々への感謝の思いとで胸を熱くしていることでしょう。同じように、この絵本も、手に入る人の心に響いてきます。思い出のよすがとしてだけでなく、これから育ちゆく子どもたちにも長岡の誇りを示すものとして読み継がれていくことを願います。

池 田 浩

訪れる人にとって魅力的な街であること

それは、子どもたちが誇りをもって暮らせる街

そして、創り出せるのは唯一我々大人たちの思いから…

みんなで上げよう フェニックス！

発行日：平成 22 年 11 月 1 日

文　　：小方恵子

絵　　：大塚 朗（SUNDAYS GRAPHICS）

ホームページ：<http://sdg.main.jp/>

編集　：池田 浩、今井雅人、三浦 明

発行人：樋口勝博

発行　：NPO 法人復興支援ネットワーク・フェニックス

新潟県長岡市大手通 1-5-9 RitzCR ビル 1 階

TEL.0258-36-2537 FAX.0258-36-2538

ホームページ：<http://phoenix-hanabi.jp/>

E-mail：info@phoenix-hanabi.jp

デザイン・DTP：スタジオオブ

印刷　：(株)北越時報社

本書に掲載の記事、イラスト等の著作権は、
NPO 法人復興支援ネットワーク・フェニックスに帰属します。
本書の収録内容の無断転載複写引用等を禁じます。
落丁・乱丁はお取り替えいたします。

Printed in Japan